

論文審査の結果の要旨

上記の論文は、宮崎県で話されている小林方言と、トルコ共和国で話されているトルコ語を対象とした、文における声の高さ（ピッチ）の研究である。地理的には遠く隔たった両言語であるが、東京方言などとは違って、単語・文節の最後の音節が高いピッチで発音されるという、いわゆる「一型アクセント」であるという点で、共通している。また、共に主語＋目的語＋動詞という語順を持ち、比較対照がしやすい（本論文は、両言語の系統関係を論じるものでは全くない）。この両言語を対象として、文の構造とピッチの関係を観察し、独自の精細な一般化を行なったのが本論文である。以下、本論文の中心をなす第2章から第4章までの概略を記す。

第2章では、小林方言とトルコ語の一型アクセントは、音韻論的な単位である「韻律語」を範囲とし、その右端の音節に High トーン素性（H トーン）が連結されることによって実現するとした。また、両言語の複合語のピッチの違いを説明するため、トルコ語の複合語に働く H トーン削除規則（この規則は疑問詞の後ろでも働く。後出）を仮定する等、独自の分析を示した。第3章では、疑問詞やフォーカス（文中の焦点）を含む文のピッチを、次のように記述した。

- (i) 疑問詞やフォーカスにおいてピッチの上昇が生じる。
- (ii) 疑問詞やフォーカスより後にはピッチの上昇が生じない。
- (iii) 疑問詞やフォーカスより前には、小林方言では、疑問詞やフォーカスを含まない文と同じく、一型アクセントの高いピッチが生じるのに対し、トルコ語では、ピッチの圧縮が生じる。

更に、(ii)の現象がどこまで続くかは、疑問のスコープによって異なることを指摘した。すなわち、間接疑問文であれば埋め込み節末まで、直接疑問文であれば主節末まで続くのである。これらの記述の一部は、特にトルコ語に関しては、従来も指摘されてはいたが、疑問のスコープまで含めた包括的な記述は、本論文が最初に行なったものである。第4章では、(ii)の現象を中心に、独自の定式化（規則や制約を用いた精確な記述）を行なった。はじめに、(ii)の現象は、H トーン削除規則により、連結された H トーンが削除されることによって生じると分析した。(ii)と類似した現象は、従来東京方言や福岡方言においても観察され、その現象を導く規則や制約が提案されてきた。本論文では、小林方言やトルコ語においては、上記の H トーン削除規則の適用領域を規定するためには、文の構造に関する情報に言及する必要があることを指摘した。すなわち、H トーン削除規則の適用領域を、「[+wh]や[+foc]を持つ要素から、それを束縛する補文標識まで」とすることで、(ii)の現象が説明できることを示した。(iii)のトルコ語に見られるピッチの圧縮については、今後の更なる研究が期待される。

以上のように、本論文は、文の構造とピッチの関係について、多くの独自のデータを示した上、理論的な一般化を行なっており、この分野の研究に貢献するところが大きい。

よって本調査委員会は、本論文の提出者が博士（文学）の学位を授与されるに相応しいと認めるものである。